

能登半島沖地震

災害支援に行ってまいりました



いずれも感染症が蔓延している中、自らも被災者でありながら、本部のスタッフとして日々努力されている方々、自宅に戻ることができない被災住民たちに、寄り添い活動して参りました。

活動報告

1/1に発災した能登半島沖地震では
栃木県看護協会からの依頼で、当院より2名の看護師が支援活動を行いました。

第1班	1/12～1/15	石川県輪島市	小学校避難所	派遣1名
第2班	1/15～1/18	輪島市	高等学校	派遣1名

災害支援ナース活動とは

- ①派遣先の現状を把握
派遣先で、私たちに求める事と、
私たちができる事が必ずしも一致するわけではない。
派遣先のニーズに応じた支援を続ける
- ②派遣先の運営者も被災者である
ねぎらうことを忘れない
不安に思うことを確認し取り除く

実際の活動内容

夜間の急患対応
感染対策
生活環境調整
日中健康相談
DVT・ストレッチ体操
心のケア

など

災害支援ナース心得

自己完結型看護支援
看護支援活動を遂行するために必要な物事を
支援者自らが責任もって準備、行動する事
どこでも眠れて、なんでも食べられて、どこでも排泄できる
そして「何とかなる」と思える

《看護の日特集の新聞記事に掲載されました》

いつか自分も支援される側になる。
災害支援ナースもチームの一員である。
協力してもらいたいことを的確に伝え
支援を得る事が必要。

皆に伝えたい事

後方支援ナース（病院で留守を守る看護士）がいるから私たちが活動できる。
自分たちが支援に行く間病院を守ることも立派な災害支援である。

日本のどこかで災害は必ず起こります。
看護士の力を必要とされるのであれば、
私たち災害支援ナースは、今後も活動を続けてまいります。

栃木県医師会塩原温泉病院

看護部長
田口 明希子さん



ニーズ把握に努め 被災者に寄り添う

田口明希子さんは、1999床のリハビリを専門に行う病院に勤務し、看護部をマネジメントする業務に従事しています。今年1月1日、栃木県でも大きな揺れを感じた能登半島地震。「今回は派遣要請があるかもしれない」と心の準備をしました。10日に派遣依頼、12日には被災地へ。輪島市へ向かう途中で派遣先が変わり、情報もなく活動を始めることになりました。避難所では田口さんと高橋さん、群馬県の看護師2

人の4人1組で活動し、リーダーを務めました。避難所に着くと、運営者も被災者で疲労が極限の状況になっていました。「ねぎらい」の言葉をかけると、運営者がほっとした表情を浮かべました。そしてすぐにニーズの把握に努めました。「やれることには限界があり、被災者のニーズに優先順位をつけて活動しました」と振り返ります。コロナが感染拡大する中、感染症対応と夜間急患対応に力を注ぎました。「24時間看護師がいる」という環境は、被災者に安心感をもたらしたと言います。

活動の意義を強調します。また「支援ナースを送り出した後、残って病院を守ってくれることも立派な災害支援です」と病院職員へ感謝の気持ちを忘れません。「日本は災害の多い地域。今回の貴重な体験を栃木県の医療・看護に生かしたい」と話しています。



避難所に血圧測定コーナーを設け待機する田口さん